

4 職員研修

(1) 大学図書館職員長期研修について

- ① 主 催：国立大学法人筑波大学
- ② 日 時：平成27年7月6日（月）～7月17日（金）
- ③ 会 場：筑波大学春日エリア情報メディアユニオン2階情報メディアホール
（7月17日のみ筑波大学附属図書館（中央図書館））
- ④ 受講者：国立大学・大学共同利用機関 31名

公立大学	1名
私立大学	4名

⑤研修報告

平成27年度大学図書館職員長期研修参加報告

公立はこだて未来大学情報ライブラリー 栗谷禎子

平成27年7月6日から7月17日まで、筑波大学において開催された大学図書館職員長期研修に参加した。図書館マネジメント総論（8科目9コマ）と学術情報流通等各論（12科目12コマ）の受講に加えて、問題発見・解決演習および班別討議に参加した。ここでは、今後の大学図書館のあり方を考える上で参考となった2つの講義について要点をまとめるとともに、演習や研修全体の所感を述べる。

図書館マネジメント総論「大学と大学図書館」

「大学と大学図書館」では、大学図書館の基本的な使命、求められる役割の変化、今後のあり方などに関する講義があり、特に以下の点が重要だと思った。

- ・ 時代の変化に関わらず、大学図書館の本質的な役割である「時代を超えて学術・文化・資料を次世代に伝承すること」は変わらないが、大学が変容する中で、図書館は変えるべきもの・守るべきものをどう考えるかが問われており、判断する上では図書館職員の識見の高さが重要となる。
- ・ 現代の大学図書館職員には多面的な役割が求められている。教員と連携した教育活動への関与・URA等と連携した研究支援・社会連携に加えて、事務レベルでも他部署との連携などが今後ますます重要になり、対人スキルの重要性も増す。

学術情報流通等各論「学術情報コミュニケーションの動向」

「学術情報コミュニケーションの動向」では、最近話題となっているオープンサイエンスやオープンデータについての話があり、特に以下の点が印象的だった。

- ・ オープンデータの公開に際してはデータに関する説明の記述が欠かせない。その際にはメタデータとして集約する必要があり、図書館職員がどのような役割を果たせるのか検討する必要がある。
- ・ オープンデータを取り扱うデータライブラリアンは、研究者と共通の言語でコミュニケーションを取りながら、データの管理をする役割を果たさなければならない。司書というよりも URA の位置づけになるだろう。
- ・ 今のところアメリカでもオープンデータの公開はそれほど進んでいないが、政府が大学にオープンデータ公開のための予算を措置した。今後急速に公開が進む可能性があり、今後の動向を注視するとともに、日本においても具体的に検討する必要がある。

「問題発見・解決演習」・班別討議

研修2日目・3日目に行われた「問題発見・解決演習」では、カードBS法・KJ法・ロジックツリーなどの手法を学ぶとともに、講師の指導の下、グループに分かれて日々の業務における課題の発見と解決案の作成を行った。研修7～9日目の班別討議では、演習で学んだ手法を用いて、グループごとに業務における課題の設定、解決案の作成、発表を行った。班別討議では講師はおらず、グループメンバーだけで試行錯誤しながら一連の作業をやり遂げた。発表会では、研修の受講者に加えて、筑波大学の教員2名および筑波大学図書館の課長が参加し、各グループの発表に対する質疑応答とコメントがあった。本グループは、図書館内にラーニングcommonsを設置したが利用者が空間を活用できていない、学習サポーターを配置したが利用されない、というグループメンバーの実際の困りごとを課題として設定し、明確なゾーニング、学習サポーター配置方法の工夫や教員を巻き込んだ学習支援体制の整備、一貫性のある広報活動などを解決案として発表した。筑波大学の教員からは、学習効果を指標化できれば予算確保等において説得力が増すとコメントを頂戴した。

所感

研修では、大学図書館経営から大学評価、古典資料の保存、学術情報の動向まで、大学図書館を取り巻く幅広い諸問題に関する最新の講義を体系的に受講することができ、今後の大学図書館のあり方を考える上で大いに役立った。演習ではKJ法などを用いた課題発見・解決手法を学んだが、講師の方が徹底的に考えることの重要性を説いていたことが特に印象深かった。丸2日間パソコンは一切使わず個々で考えグループで議論したことは、KJ法を使って問題を解決するというよりも多方面から深く考えることを体験させることが目的ではないかと思った。

研修には全国各地から国公立の大学職員が参加した。公立大学からの参加は本学以外に当初は不安を感じたが、講義や演習を通じてすぐに他の受講者と打ち解けることができた。受講者の多くが同じホテルに宿泊し、暑い中研修会場まで一緒に通い、昼食を共にとり、講義終了後はお互いの図書館や業務について情報交換を行った。受講者の多くが関連の研究会に所属している、職場で勉強会を自主開催する、など通常の業務以外でも研さんを積んでいることがわかり、

刺激となった。また、班別討議では限られた時間内に成果を出すことが求められたため、グループ内で分担して課題を持ち帰り、翌日の休憩時間にメンバーでまとめ作業を行った。こうした交流を通じて他の受講者と親睦を深めることができた。研修で得られた人脈は今後大学図書館に携わっていくなかで大きな財産になると思う。

研修は、問題意識を高めることができたよい機会となったとともに、日常業務では得られない様々なものを得ることができた。今回得た知識や人脈を活かして、今後の業務にあたりたい。

最後に、このような有意義な研修に参加する機会を与えてくださった公立大学協会図書館協議会に心から感謝するとともに、研修に送り出してくれた職場の上司・同僚にも謝意を伝えたい。

第2 平成27年度事業報告

7月		午 前			午 後	
		9:15-10:45		11:00-12:30	13:45-15:15	15:30-17:00
6	月	9:30 受付	10:00 オリエンテーション	11:30 開講式 文科省講話	大学と大学図書館 植木俊哉 東北大学附属図書館長	図書館建築と設備 植松貞夫 跡見学園女子大学教授
7	火	問題発見・解決演習		問題発見・解決演習	問題発見・解決演習	問題発見・解決演習
8	水	問題発見・解決演習		問題発見・解決演習	問題発見・解決演習	問題発見・解決演習
9	木	公立図書館の戦略 船見康之 潮来市立図書館長	私立大学図書館の経営 長谷川豊祐 鶴見大学学術情報事務長	国立大学図書館の経営 尾城孝一 東京大学附属図書館事務部長	古典資料の保存と利用 山澤学 筑波大学准教授	
10	金	経営学入門 I, II 佐野享子 筑波大学准教授			大学経営の課題 吉武博通 筑波大学教授	研究者のアクセス手法 I 深貝保則 横浜国立大学附属図書館長
11	土					
12	日					
13	月	大学評価と大学図書館 土屋俊 大学評価・学位授与機構教授	図書館と法 石井夏生利 筑波大学准教授	ディスカバリーサービスの デザイン 宇陀則彦 筑波大学准教授	研究者のアクセス手法 II 中山伸一 筑波大学附属図書館長	
14	火	大学図書館員の新たな役割 竹内比呂也 千葉大学附属図書館長及び アカデミック・リンク・セン ター長	国立情報学研究所の戦略 酒井清彦 国立情報学研究所 学術基盤推進部次長	班別討議	班別討議	
15	水	利用者の情報行動 逸村裕 筑波大学教授	大学図書館の学習支援 長澤多代 三重大学准教授	班別討議	班別討議	
16	木	学術情報コミュニケーション の動向 佐藤義則 東北学院大学教授	テレビ朝日の5メディア戦略 河田隆 株式会社テレビ朝日	班別討議 発表	班別討議 発表	
17	金	筑波大学 中央図書館 見学	ヒューマン・リレーションスキル 橋本佐由理 筑波大学准教授	閉講式		

会場：筑波大学春日エリア 情報メディアユニオン2階 メディアホールほか

7月17日（金）は、第一エリア（中地区）筑波大学附属図書館（中央図書館）

(2) 大学図書館職員短期研修について

- ① 主 催：国立大学法人京都大学
- ② 日 時：平成27年10月6日（火）～平成27年10月9日（金）
- ③ 会 場：京都大学附属図書館3階 ライブラリーホール

- ④ 研修報告

平成27年度大学図書館職員短期研修参加報告

兵庫県立大学 神戸情報科学学術情報館 井上 敦子

平成27年10月6日から9日までの4日間、京都大学にて開催された大学図書館職員短期研修に参加した。大学図書館職員のスキルアップ向上のため、「大学図書館の現状と課題」、「学術情報リテラシー教育の現状」等について他大学・他機関の先生方にご講演いただき、最終日にはグループ討論したことを発表した。

内容は多岐にわたるものであったが、いずれも大学図書館について職員がどのような役割を果たしていくべきかといった講義であった。ここでは下記の講義についての所感についてまとめる。

【大学図書館の現状と課題】

大学図書館とは大学という組織の中にある機関だが、社会の中に大学という教育機関があり、その中に存在しているのであるため、単体で改革をすることは不可能である。つまり大学図書館を変えていくには図書館職員及び教職員（他大学の図書館職員、他大学・他機関の教職員を含む）等との連携が必要不可欠である。大学は学術情報の作成・発信を行っていかなければならない。大学がそれらを作成し続ける限り大学図書館は支援をしていくことが役割である。

大学図書館の職員に求められる新たな知識・見識が変化している。この背景として、電子化（紙媒体から電子媒体への転換）や研究支援を行うための機能の変化などが考えられる。情報社会が進むことにより情報収集が容易になった今、図書館の機能も軽視されつつある。だが、単なる学習目的の空間ではないのは言うまでもない。図書館の可視化を実現させるために大学図書館員は何をしていくべきなのかについて改めて考えることとなった。

【学術情報リテラシー教育の現状】

情報社会が進み、リテラシー教育を重要視する必要がある。収集したい情報をどのような手段で手に入れることができるかを学ぶ講習会がさまざまな大学で開催されている。

研究者（学生・教員等）が検索ツールをどの程度理解し、利用しているかを大学図書館職員が調査し、様々なニーズに合った講習会やガイダンス等を行うことが研究支援であると言える。ご講演いただいた須賀井先生の在籍されている東京大学では、昼休み（20～30分程度）の短時間講習や夜間（18時30分ごろ）スタートの講習など、講義時間を色々設けること、さらには講義内容

として同じテキストであっても説明を受けるだけではなく、実習で実践させることで身に付き方が違うというお話をうかがった。その中で特に、初年次からどういった教育をしていくべきなのかを図書館職員はじめ教職員が考え、カリキュラムを組むことが大切であるとのコメントが心に残った。他部署・他機関・教職員等と協同しながら支援活動を行っていることを知ることができた。

【その他】

以上のほかグループ討議・発表では、他大学の図書館職員と各々の大学図書館の利用実態を知ることができ、自館の欠点や改善点を発見することができた。グループ討議では「これからの図書館職員のあり方について考える」「これからの学術情報リテラシー教育実践を考える」「海外調査研修計画を企画立案する」この3つのテーマの中からどれかひとつのテーマについて班ごとに分かれて行った。私の班は「これからの図書館職員のあり方について考える」をテーマとして討議・発表した。大学図書館の実態として人員・予算の問題（専門職員の増加、非正規職員の増加、兼務職員の増加）（消費税UP、課税、助成金の削減）、図書館と図書館外の意識の相違（図書館職員はカウンター業務のみだという誤解、電子化されたら業務が楽になるなどすなわち図書館職員は誰にでもできる業務である）、紙媒体から電子媒体への転換に伴う業務の拡大（契約書などの諸手続き（経理事務や上司への相談・報告）、電子資料の登録作業など）が挙げられた。こういった問題の解決策として共通することは図書館の可視化である。大学図書館の実情や課題を少しでも多くの人に周知してもらうためには他大学・他部署・教職員、他機関との連携を図るとともに、ガイダンスや講習会をすること等が今後の課題であると言える。さらに、【大学図書館の現状と課題】でも述べたが、大学とは研究者の学修支援をする機関であり、大学図書館とは研究者が作成した学術情報を発信（提供）する場であるため、大学図書館職員はその過程を見守り、支援をしていく必要がある。

この研修を通じて、大学図書館のあり方が大きく変化してきており、書架に並んでいる蔵書を閲覧・貸出するだけのサービスであってはいけなし、そうではない。近年、大学図書館とは生涯学習を行う場として定着しつつある。これは大学図書館内に併設されているラーニング・コモンズの部屋を作り、ネットワーク環境も整え、研究者同士が討論できる環境づくりを図書館職員をはじめ大学の職員等が協同して設けているからである。環境づくりをしていくこと、こういったマネジメントを行うことも大学図書館職員に課せられた任務であると痛感した。

研修内容だけではなく、大学図書館職員同士で情報交換し、共有できたことを嬉しく思う。

最後に、このように有意義な研修に参加する機会を与えてくださった公立大学協会図書館協議会に心より感謝の意を述べたい。また、研修に参加するにあたり業務を支えてくれた職場の方々にもお礼を申し上げたい。

平成27年度大学図書館職員短期研修参加報告

北九州市立大学図書館 田中寛子

平成27年10月6日から平成27年10月9日まで、京都大学主催の大学図書館職員短期研修に参加した。社会変化に伴う大学のあり方の変化・大学図書館が今後取り組むべき課題・図書館職員のスキルアップ法などを中心とした11コマの講義を受講したほか、そこで学んだ内容を意識しながら班別討議および発表を行った。

ここでは、研修全体の概要と所感を、情報化・電子化の話題を中心としながら「大学および大学図書館が置かれている状況や課題について」と「課題解決のための協力体制・図書館職員のスキルアップについて」の二点に分けて報告する。

【大学および大学図書館が置かれている状況や課題について】

近年の大学および大学図書館が置かれている状況への言及で、いくつかの講義に共通していた点は2点あった。1つは、国際化・情報化・学生の能力変化などによって生まれる多様なニーズへの対応と問題点への対処に関するもので、もう1つは18歳人口減少・産業構造の転換などによって増すばかりの財政難に関するものだ。総じて、現在、大学および大学図書館が置かれている立場は大変厳しいものであるという内容だった。

特に情報化・電子化と財政難の問題については深刻なものがあるようだ。資料の電子化に対するニーズは、理系のみでなく文系でも高まりつつある。具体的には、電子ジャーナル・電子書籍などの導入および維持にはじまり、オープンアクセスジャーナルの普及、学内で生産される研究成果のデータ化・オープンアクセス化、より関連度と精度の高い目録や検索環境の整備などである。しかしそれらに背を向けるように、現場では問題が多発している。その主たるものとして、年々確実に上昇する電子資料の価格に反比例して減額となる予算の問題と、海外電子資料への消費税課税の開始と支払い業務負担増加の問題が挙げられる。このような大学図書館の予算・人員に関する課題は、本研修でも複数の講義で解説されていた（『大学図書館の現状と課題』『電子コンテンツ導入・利用の現状と課題』『学術コミュニケーションの動向』『目録の未来と現在』）。

また、導入や整備以外では、リテラシー教育についても課題がある。今回はその一部として、学習上必要十分な情報を得られているかを意識することが不得手な学生による、検索ツールを利用した情報探索の十分・不十分の問題や、自分の考えを自分のことばで表現できない学生による情報盗用の問題などが挙げられた（『学術情報リテラシー教育の現状』『大学を取り巻く状況と大学図書館の役割』）。

そのほか、電子化時代の教育学習空間として増えてきているアクティブ・ラーニング・スペースの整備・活性化と、付随して需要が高まるであろうファシリテーション技術の会得は、大学図書館にとって今後の重要な課題になると思われる。ファシリテーションの技法は『効果的なグループ討議法』で教えていただいた。

このような国内の事情を踏まえて海外に目を向けてみれば、JULAC という共同体を形成している香港の一部の大学では8～9割が電子資料という蔵書構成の上、アクティブ・ラーニング・スペースの整備もかなり進んでいるようだ。講義の中で、情報収集のみでなく人脈形成もできる海外研修の重要性と、実現のためのノウハウを教えていただいたのだが、確かに国内での情報交換に留まらず多くの図書館員が海外に目を向けることは、「ガラパゴス化しがちな」日本の図書館にとって重要なことだと感じた（『海外研修経験から見た大学図書館(2)』『海外研修経験から見た大学図書館(1)』）。

【課題解決のための協力体制・図書館職員のスキルアップについて】

このような課題の解決策として、かなり多くの講義で話題になったものが2点あった。1つは公的な提言の参照・活用、もう1つは全国の他大学図書館や自機関内の他部局・教職員・学生などとの協力体制の形成だ。

特に公的な政策・提言に関してはこれまで、現場の忙しさが増すほどに確認を怠ってしまいがちだったが、講義内で「知っていて使いません、というのはありますが、そもそも知りません、というのはなしではないですか」という旨のお言葉があり、胸に刺さった（『大学図書館員のスキルアップ法』）。今回グループ討議の際に多く参照したものに「高等教育のための情報リテラシー基準 2015年版(国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会)」がある。使ったのは「活用体系表」で、これはリテラシー教育の企画・目標設定・評価等を行う際に参考となるものだ。研修内のみでなく、現場でも公的な提言の参照を思い出せたなら、よりレベルの高いサービス提供ができると感じた。

2つめの協力体制の形成については、様々な形がある。『国立情報学研究所の学術コンテンツ事業戦略』では、過去から未来へ向けての様々な事業の一部として、リソース・シェアリング的なものではNACSIS-CAT/ILL・CiNii・JAIRO Cloudなどを、コンソーシアム的なものではJUSTICE・機関リポジトリ推進委員会などをご紹介いただいた。また『学術情報リテラシー教育の現状』および『大学を取り巻く状況と大学図書館の役割』では、学内の教員や、秘書を含む職員、学生団体、個人などのニーズを図書館側で積極的に見つけ、連携していくことを教えていただいた。

ここで先述の大学図書館が抱える具体的な課題を振り返る。講義内では、情報化・電子化に関してはコンソーシアム的な解決策が多く紹介された。電子コンテンツ契約に関する協力体制であるJUSTICEは複数の講義で言及されていたし、機関リポジトリの発展・推進に関しては機関リポジトリ推進委員会やDRF、ほかにもSCORP³やCLOCKSなど、各地で様々な活動や協力が行われているとお話だった。また、目録の技術発展に関してLinked (Open) Dataの話題も出た。「学術情報流通の量とスピードに対する、需要と技術革新のいたちごっこ」で変化が激しい分、人と人の繋がりや、情報上での繋がりによって解決を図るケースが多いようだ（『大学図書館の現状と課題』『電子コンテンツ導入・利用の現状と課題』『学術コミュニケーションの動向』『目録の現在と未来』）。

リテラシー教育の課題に関しては、公的な提言の確認と、協力体制形成の両面が挙げられた。

公的な提言では既出のものほかに「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）平成25年8月（科学技術・学術審議会 学術分科会 学術情報委員会）」などが紹介された。また、協力体制に関しては、図書館が学生の情報検索をサポートし、教員と連携して「調べた知識を、学生が自分で考えて組み立て直すことを支援」することや、「ニーズを探ってあちこちと連携」し、「構成員すべてに対する学術リテラシー教育」を行うことについて教えていただいた（『大学を取り巻く状況と大学職員の役割』『学術リテラシー教育の現状』）。

以上のような団体的な解決策と同程度に、個々の図書館員のスキルアップも大切だ。そのひとつとしてファシリテーションの技法を学んだのだが、中でも特に記憶に残ったのは「ラウンド＝ロビン」というグループ内で1人ずつ順番に平等に話すという手法だった。自分の主張は「心のノート」に書き留めて発言の順番を待ち、他者の話を「傾聴する」という、参加者全員が主張と傾聴の両方を平等に行える環境を整えることが、議論の促進には最も重要だと感じた（『効果的なグループ討議法』）。また、具体的なスキルアップとともに、本研修で出会えた他大学図書館の方々と今後も継続して交流を図るなど「仲間とつながる」こともとても重要だ。最初は単純な「知人との情報交換」であるものを徐々に変えていき「仲間と未来を考えること」ができるようになれば、個人だけでなく図書館全体でのスキルアップに繋がるとのお話だった（『大学図書館員のスキルアップ法』）。

最後にグループ討議についてだが、本研修の参加大学は国立大学5割・私立大学4割・公立大学1割となっており、国公立の差や大学規模の大小の偏りが少なく、多種多様な立場の職員が集まった状態で、有意義な情報交換ができた。また、発表の場でも、これまで考えもしなかったような斬新なアイデアを目にすることができたのは、今後の大きな力になると思われる。

この度、この研修に参加する機会を与えてくださった公立大学協会図書館協議会の方々と、このような有意義な研修の場をご用意くださった京都大学の方々に、心から感謝の意を述べたい。また、不足する現場のマンパワーを最大限の工夫で補い、研修に参加するための時間を作ってくれた職場の同僚には感謝するとともに、得た知識を共有し、全員の力の底上げができるよう尽力することで、これに報いたいと思う。

10/6 (火)	9:30～ 9:45	開講式
	9:45～11:00	大学図書館の現状と課題 / 甲斐重武 (京都大学附属図書館事務部長)
	11:15～12:30	学術情報リテラシー教育の現状 / 須賀井理香 (東京大学情報システム部情報基盤課学術情報チーム(学術情報リテラシー担当)係長)
	13:45～16:25	効果的なグループ討議法(講義) / 岩田好司 (久留米大学外国語教育研究所長)
	16:35～17:35	開催大学図書館見学
	18:00～20:00	情報交換会
10/7 (水)	9:30～10:45	大学を取り巻く状況と大学図書館の役割 / 井下千以子 (桜美林大学心理・教育学系教授)
	10:55～11:40	海外研修から見た大学図書館(1) / 上野友稔 (電気通信大学学術情報課学術情報サービス係主任)
	11:40～12:25	海外研修から見た大学図書館(2) / 嶋田有理香 (関西大学図書館事務室)
	13:30～14:45	大学図書館職員のスキルアップ法 / 井上昌彦 (関西学院大学神戸三田キャンパス図書メディア課課長補佐)
	15:00～17:30	グループ討議
10/8 (木)	9:30～10:45	電子コンテンツ導入・利用の現状と課題 / 笹渕洋子 (早稲田大学図書館総務課)
	11:00～12:15	学術コミュニケーションの動向 / 杉田茂樹 (千葉大学附属図書館利用支援企画課長)
	13:30～14:45	目録の現在と未来 / 小山憲司 (日本大学文理学部教授)
	15:00～17:30	グループ討議
10/9 (金)	9:30～11:40	グループ討議・報告会(発表と質疑応答含む)
	11:40～12:00	講評 / 甲斐重武、細川聖二 (京都大学附属図書館事務部長、国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課長)
	13:00～13:50	グループ討議・班別振り返り・修正作業
	14:00～16:10	グループ討議・変更箇所を中心とした最終報告会
	16:10～16:55	国立情報学研究所の学術コンテンツ事業戦略 / 細川聖二 (国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課長)
	16:55～17:10	閉講式

会場：京都大学附属図書館3階 ライブラリーホール

グループ討議は4階大会議室または4階研修室